
仮面ライダークウガ！のごとく！

郡司侑輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダークウガ!のごとく!

【Nコード】

N7730P

【作者名】

郡司侑輝

【あらすじ】

2009の技を持つ小野寺友樹が、2010番目の技を使い未確認生命体グロンギから、皆の笑顔を守る為に闘う 畑 健二郎（代表漫画【ハヤテのごとく!】）画と想像してください。

装着（前書き）

この小説の主人公は間違っても五代友樹ではなく、小野寺友樹であることを、強く言っておきます。

五代友樹「頑張ってね」

小野寺友樹「うん！」

では始まります。

装着

長野県 九郎ヶ岳 午後8…30

教授「よし、いいぞ撮影始め！」

生徒1「はい」

長野県にある九郎ヶ岳の洞窟の中。大学から派遣されてやって来た考古学教授と生徒五名が、遺跡調査をしていた。

その六人の目の前に巨大な棺があり、それを教授を含めた二、三人が集まっていた。

生徒1「見たこと無い文字がいっぱいだなあ」

生徒2「もしかして、これ開けたら……呪われるんじゃない？」

教授「なあに言ってんだ。たいていは『こういうのが供えられています』って書いてあるんだよ」

生徒3「それじゃあ開けますよー」

ガゴン と大きな音をたてて棺の蓋は外され落ちた。一つの溝の中に、腐敗し変色した遺体があり、腰にはベルトの様な装飾品が見付かった。

生徒4「ミイラ………ですかね？」

生徒5「だとしても、奇麗過ぎませんか？」

その時、微かに遺体の指が動いた。しかし、そこにいた教授と生徒達には気付かなかった。

ゴゴゴゴ………

教授「な、何なんだ……!？」

突如として起きた地震。その揺れが続き動揺した六人はあたふたとしていた。

揺れが治まると、棺が鈍い音を立てた。その下から謎の生命体が現れた。

教授「なっ……なん、ぐばはぁ!」

謎の生命体は教授を一撃で殺害し、次々と生徒達を襲い、殺害していった。その姿は、ビデオカメラに収められていた。

東京都 杉並区 午前8…01

友樹「やっぱ!もうこんな時間!？」

友樹は急いで家を出た。口に食パンをくわえて走っている。典型的な遅刻の例である。

小野寺友樹おのでら ゆうきは白皇学院に通学している高校二年生。ルックスは普通、しかし学力とスポーツは天才的な成績を残している。2009の技を持つ男。

紗耶香「おはよ友樹」

友樹「あ、紗耶香おはよ。っていうか、遅刻しちゃうよ!!ほら、急がなきゃ!!!」

友樹を呼び止めたのは幼なじみの芦河紗耶香。あしかわ さやか友樹と同じ高校に通う白皇の二年生。彼女は白皇の生徒会長と紙一重のルックスで成績も優秀でその生徒会長と友樹の次に優秀である。

紗耶香「また遅刻かなあ?」

友樹「それだけは回避したいな」

友樹は朝が非常に弱い為、寝坊してしまう。それで遅刻するので、現在三日連続で遅刻している。

友樹「ってか、なんで紗耶香までこんなに遅くなってんの?」

紗耶香「気にしない気にしない!」

友樹の問いに紗耶香は笑顔で答える。

そんなこんなで校門が見える。

友樹「やった。まだ門は閉まって無い!」

紗耶香「だったらいそぐべし!!」

二人は更に走る速度を速めると、一人の人物とばったり会う。

雪路「お、ぎりぎりじゃないか。よかったな小野寺、遅刻記録更新にはならなかったぞ」

かつらゆきじ
桂雪路は友樹と紗耶香のクラスの担任で生徒会長の姉である。楽しんで金が欲しいという欲望が強く、金を酒に変える人。

友樹「おはようございます、桂先生！」

紗耶香「おはようございますーす！」

雪路「ほらほら、挨拶はいいからとっとと教室へ行きなさい！！」

白皇学院 高等部二年生三組 午前8…25

友樹「間に合った………」

ハヤテ「おはようございます、小野寺君」

友樹「あ、おはようハヤテ」

綾崎ハヤテと友樹は親友。両親から一億五千万の借金を押し付けられたうえにヤクザに体を売られた。しかしそこを、有名な三千院グループの令嬢の三千院ナギが肩代わりしたという。なので、今ハヤテはその三千院家の執事をやっているのだ。

友樹「あれ、ナギちゃんまたサボり？」

ハヤテ「ええ、『昨日行っただから行かない』って」

紗耶香「それ、屁理屈よね」

東京都 ミカド研 午前9…02

詩織「これが、長野の遺跡で発掘されたベルト……ですか？」

一条「ハイ。それも、何千年も前の物と思われます」

エイト「主任……これって…」

三人（エイトはロボットなので一機）は囲む様に、九郎ヶ岳から発掘されたベルトを見ていた。

一条「このベルトを身につけたミイラが発見されて、その棺の下から謎の生命体が現れ、調査に向かっていた教授一人と生徒五人が殺されています」

詩織「えげつないわね。その姿は？」

一条「撮影に使われていたビデオカメラに、無惨に殺されていく六人と、謎の生命体のシルエットしか見えませんでした」

詩織「成る程、あんまし見たくないわね」

一条「警視庁を含む我々警察は奴らを『未確認生命体』と呼称する

こととなりました」

詩織「で、映像に映っていたのは？」

一条「零号です」

東京都 白皇学院 午後3…23

紗耶香「え、ミカド研に？」

友樹「ウン。なんでも、長野県から見付かったベルトに書かれている古代文字の解説を手伝えって詩織さんが」

その知らせを聞いたのは帰りのホームルームが終わり、ケータイの電源を入れた時にメールが届き今に至る。

友樹「別に何人来てもいいからって言うし、ハヤテ達も誘ってから行こうかな？」

紗耶香「誘わなくても、後ろにいるよ」

紗耶香に言われ、友樹は後ろを向いた。そこにはハヤテと生徒会長の桂ヒナギク、そして通称動画研の三人とサボっていたはずのナギの姿があった。

友樹「あ、生徒会長とナギちゃん。……………と泉と美希と理沙」

ヒナギク「ちょっとミカド研に差し入れをね」

ナギ「家にいても退屈なだけだしな」

泉「ニヤハハ……社会科学見学なんだよね」

美希「というか、完全におまけ扱いだな」

理沙「だな」

取り合えず、一度着替えてから行こうと友樹が言うので一旦解散し、三十分後にまた集まってミカド研に向かった。

ミカド研 午後5…00

エイト「主任！べっ、ベルトが！」

詩織「え、なっ何よこれ」

突如ベルトは光りだした。まるで自分の主が来るかの様に。その時、ベルトの光が止むと同時に友樹が現れた。

友樹「詩織さん、手伝いに来ました」

詩織「あ、友樹。ちょうどいいところに来たわね」

友樹「どういふことですか？」

エイト「主任は小野寺にこのベルトに触れて欲しいと言っているんだ」

詩織とエイトに促され、友樹はベルトに触れた。

友樹「!？」

その瞬間、友樹の頭の中にビジョンが見えた。

一人の仮面の赤い戦士が化け物達を拳と蹴りで圧倒して、また体の色が変わって青の戦士は棒術で圧倒して、緑の戦士は銃の様な物で、そして紫の戦士は剣を使って戦っていた。

紗耶香「友樹？」

友樹「……あ、えと……」

紗耶香に呼ばれ、我に返った友樹は周りを見て先程見たビジョンを詩織と紗耶香を含めた全員に言った。

詩織「超古代の戦士のベルト………」

友樹「はい」

ヒナギク「ふうん」

ハヤテ「ヒナ、何でそんなに疑うの？」

ハヤテに言われヒナギクは紗耶香を見た。紗耶香は友樹の腕を抱きしめてヒナギクを睨んでいた。

芦河紗耶香と桂ヒナギクは犬猿の中である。髪の色といい、髪飾りの形といい、体型と顔以外殆ど同じの二人はこれまで、仲良くなつたことは滅多にない。

その時、外が異様に騒がしかった。窓を見ると、外にはクモの顔をした異様の怪人が、パトカーを破壊して警察官も殺していた。

友樹「詩織さん、ベルトを持って早く避難を！」

詩織「え、ええ」

友樹「皆、裏手から逃げよう！」

紗耶香「ええ」

その場にいた十人は裏側から脱出を計った。が…………。

詩織「しまった！！この裏側って使い物にならないんだった！！！」

友樹& a m p ; ハヤテ「何ですってえ！！！」

仕方なく表口に急ぐ友樹達。すると、パトカーが入口を突き破って来た。その中からクモの顔をした怪人がいた。

友樹「なっ……………」

????「ゴセパ、ズ・グムン・バ（俺は、ズ・グムン・バ）」

クモ怪人…もといズ・グムン・バは次々と出て来た警備員を攻撃していた。

その時、友樹の頭の中にまたビジョンが見えた。

友樹「詩織さん、ベルトを貸して」

詩織「え？で、でも……」

友樹「早く！」

詩織「え、ええ！」

友樹は詩織からベルトを取ると、自分の腰にあてた。すると、ベルトと体が一体になるかの様に友樹の体に痛みが走る。

友樹「ぐう……ああ……」

紗耶香「……ベルトが」

詩織「一体化した！？」

すると、ズ・グムン・バが友樹に気が付いたのか、友樹に襲い掛かった。が、すんでのところで避け、外に出た。

紗耶香「友樹！！」

ヒナギク「追うわよ！」

泉「というか、もう逃げられないよね？」

美希「そうだろうな」

理沙「全く、友斗君は困った奴だな」

紗耶香「友斗じゃなくて、友樹！」

ハヤテ「それより……」

ナギ「友樹がどうなっているのか気になる」

詩織とエイト以外の七人は友樹を追いに行った。遅れて詩織も後を追った。

ミカド研にある駐車場に、友樹とズ・グムン・バはそこにいた。

ズ・グムン・バ「ガアアア………！」

友樹「ううわ!!」

ズ・グムン・バのパンチが友樹を吹っ飛ばした。

友樹「このままじゃあ……殺される。そんなの嫌だあ！」

脳裏にちらつく紗耶香が友樹を奮い立たせ、ズ・グムン・バに渾身のパンチを浴びせた。

そのパンチが当たると、当てた左腕が変わった。

友樹「……………変わった?！」

隙を見たのか、ズ・グムン・バが友樹に襲い掛かった。しかし友樹は怯むことなく、パンチやキックを繰り出していた。それと同時に、友樹の体もみるみる内に体に白い装甲がついて最後には黄色い角と赤い目をした戦士に変身していた。

紗耶香達は、友樹の左腕が変わった瞬間からその光景を見ていた。

続く

装着（後書き）

オリキャラ紹介PART1

時系列Ⅱ6月29日

名前Ⅱ小野寺友樹

年齢Ⅱ16歳

誕生日Ⅱ8月15日

身長Ⅱ173cm

体重Ⅱ52kg

白皇に通う高校二年。2009の技を持つ男。好きな物は笑顔で、誰かの流す涙を見れば自分も泣いてしまう程のお人よし。幼なじみの芦河紗耶香とは友達以上の関係。以後彼のデータは後々に色々と出ます。

正体（前書き）

今回は戦闘はありません。

正体

クウガ・G 「はぁ…はぁ…」

何とか、ズ・グムン・バから距離を取ったクウガは、驚きを隠せていないズ・グムン・バに警察が使っているトラックをズ・グムン・バにぶつけ、壁まで押し通した。そのトラックと建物の壁に挟まれてしまい、壁まで破壊された。

クウガ・G 「やったか？」

案の定まだズ・グムン・バはやられていなかった。クウガの姿が目映ったのか、ズ・グムン・バはクウガを掴んで建物の屋上に連れ去った。

紗耶香 「友樹！！」

紗耶香は叫ぶが、ズ・グムン・バは容赦無く、クウガを屋上に連れ去った。

その時、警視庁の専用ヘリが飛んでくるのが見えた。その中に、詩織が知っている男の姿があった。

詩織 「一条さん……」

そのヘリはクウガとズ・グムン・バの向かった建物の屋上に向かった。

同時刻

ズ・グムン・バ「グアアッ！」

クウガ・G「あぐうっ！」

ズ・グムン・バの口から高密度の蜘蛛の糸が射出され、クウガの喉元を締め上げた。

バキュン

ズ・グムン・バ「グッ？」

上空に滞空するヘリから、一条がズ・グムン・バに向けてコルトパイソンの引き金を引いた。

標的を変えたかの様に、ズ・グムン・バはクウガを解放すると同時に、一条を乗せたヘリに飛び込んだ。

一条「み、未確認生命体はこれ程の………」

驚愕する一条に、自分の腕に内蔵されている刺で息の根を止めようとしたその時、クウガがそれを阻止した。

ただ、空中で滞空するヘリでクウガとズ・グムン・バは何とか落ちないように、攻防を続けた。最後にはズ・グムン・バを落下させる事に成功したクウガは、一条に向け、サムズアップした。

次の日 杉並区 午前7…05

友樹「すう……………すう……………」

友樹は昨日の変身による疲労で、自分の部屋でまだぐっすりと眠っていた。

その同じ時刻、下の階のリビングで白皇中等部三年である妹のおの小野寺紗由が客人に茶を出していた。

紗由「え？お兄ちゃんが変身……………」

紗耶香「……………うん」

ハヤテ「小野寺君は遺跡……………九郎ヶ岳から発掘されたベルトを身につけて、そこにいた未確認生命体第一号と戦っていました」

ヒナギク「白い仮面の戦士にね」

ナギ「ニュースでもそんな事言ってたしな」

ナギがテレビの電源を入れると、丁度キャスターが未確認生命体のニュースを読んでいる所であった。

＜突如として現れた未確認生命体第一号は、警視庁の警官を数人殺害したのち、ミカド研を襲撃。そこに新たな未確認生命体第二号が現れ、一号を撃退したとの事です。続いてはお天気で――＞

プツン

ナギ「という感じだ。アイツはよくよく無茶をするんだな」

紗由「お兄ちゃんは昔っからそうなんです」

紗耶香「そうそう、難しく言えば蛮勇だったよね紗由ちゃん」

紗由「ハイ」

するとナギがまた何かを言い出した。

ナギ「それより、この事を知っているのは私の他に、紗耶香、ハヤテ、詩織、ヒナギク、泉、理沙、美希、エイトそして沙由の十人」

ヒナギク「あの三人には口を固くするように言つといたわ」

その時、階段を降りるような足音が聞こえてきた。しばらくして、その足音の主が現れる。

友樹「ん、んゝゝゝ………っあ!」

紗由「あ、お兄ちゃんおはよ!」

友樹「んー。……ってあれ?何の御集まりですか?」

ハヤテ「昨日、小野寺君が変身した事で」

友樹「ああ昨日?あの時帰ってすぐに寝ちゃったよ」

紗耶香「えーっ?意外ねえ、結構夜更かしするのに」

友樹「まあ、変身したらそうなるよ。でも、大丈夫大丈夫」

紗耶香「でもびっくりしちゃったわよ！いきなりベルトを装着して変身しちゃうだもの！」

友樹「大丈夫大丈夫だって。心配無いつて」

そういつて友樹は笑顔でサムズアップした。

その時、インターホンが鳴り響く。紗由が玄関まで向かい、数分して友樹が助けた男・一条が入って来た。

一条「小野寺……君は誰だい？」

紗由「お兄ちゃんなら……」

紗由は友樹を指差し一条に教えた。

すると一条は懷から未確認生命体第一号ことズ・グムン・バの写った写真と同じく未確認生命体第二号ことクウガが写った写真を出した。

一条「この白い未確認生命体第二号が、小野寺君君だね？」

その一条の発言に、一同はギクツと言う擬音が合う雰囲気漂っていた。しかし、それを妹の紗由がぶち壊した。

紗由「ほんとだったんですか！？お兄ちゃん凄いい凄いい！！」

友樹「さっ、紗由！」

一条「やっぱりそうか。カマをかけといて正解だった」

友樹「あゝ！」

すると一条は友樹に詰め寄り、己の本心を言った。

一条「ミカド研の詩織さんから聞いた。もう君は危険な事をするな！後は我々警察がやるから、事態が鎮静化するまで大人しく平和に過ごさない！」

友樹「あ……………ハイ」

一条「ではこれで」

そこまで言うと、一条は去って行き、言われた友樹はただボー然としていた。

紗耶香は紗由を別室に連れて釘を刺した。それも友樹が未確認生命体第二号であることを内密にすることだ。

紗由「分かりました。でも何で紗耶香さんが？お兄ちゃんからなら分かりますが……………」

紗耶香「なっ、何でも無いの。あ、ほら正体が知れたら友樹もいろいろと大変でしょ？」

紗由「あ、ハイ」

続く

正体（後書き）

名前〓 芦川紗耶香

年齢〓 16歳

誕生日〓 2月5日

身長〓 167cm

体重〓 秘密

小野寺友樹の幼なじみで、白皇高等部二年。

友樹がクウガに変身したことを戸惑うが、影で支えようと努力する。
同じ学年の桂ヒナギクとは犬猿の仲だが、そんな描写は少ない。

暗翼

東京都 杉並区 午後8…00

女性「あ、ママ？あたしあたし」

とある教会の近く。一人の女性が夜道を歩きながら母親に携帯電話から通話をしていた。

女性「そーそー、遅くなるから……」

その女性を教会の屋上から見つめる影があった。影は鋭い牙を光らせ、目標を定めて飛翔した。
そして、次に女性が気が付いた時は既に影の餌食になっていた。

翌日 同所 午前7…03

数台のパトカーから降りた警察の中に一条薫の姿はあった。

杉田「あーあーあーあー。これで何件目だあ？女性ばかり狙っている殺人は」

被害者の女性の遺体拝み、愚痴をこぼしたのは一条の同僚である杉田守道刑事。家に帰ればただのマイホームパパである。

桜井「四件目だそうです。まるで、吸血鬼に生き血を吸われた死に

方からして」

鑑識に死因を聞い杉田に報告したのは桜井剛刑事。同じく一条の同僚である。

一条「これも、未確認の犯行だと思います」

杉田「かもな。2010というこの時代でこんな傷跡が、まるで牙で刺したような跡は出来まい」

ハヤテ「大変な騒ぎですね」

友樹「また人が死んでく……………」

野次馬の中に、早朝トレーニング中のハヤテと友樹の姿があった。今日は休日だから今はゆっくり出来る暇があった矢先に、現場に集まる野次馬に気付き今に至る。

友樹「この前の一号とは違う手口……………だよな」

ハヤテ「はい。一号は蜘蛛の様な姿ですから蜘蛛の糸や鋭い針を使うはずですよ」

小声で話していた二人は周囲に警戒していた。未確認生命体一号、公になってはいるがごく僅かな人間しかそれを知らなかった。

ふと、友樹の視線の端に早朝だと言うのに二人の親子が現場近くの

教会の入口に立ってノックをしていない事を悟り、歩きだしていた。その二人の会話が耳に入る。

子「ママ、なんでしんぷさまいないの？」

母親「きっと神様に、平和な世の中になりますように祈ってるのよ」

どうやら神父を尋ねた信者の親子らしい。

友樹は何故か教会が気になり、ハヤテに先に帰る様に促した後、教会に向かった。運がいいのか、裏口が開いていた。

友樹「（よかった、ちゃんとした裏口があった）」

友樹は裏口から入り、不法侵入をした。

以前ミカド研で裏口から逃げようとしたが、使えなくなったことを思い出した。

友樹「（えっと、ここ初めてだから）」

あてずっぽうにさ迷っていると、入口から直接繋がる礼拝堂に到着した。

入口のドアに触れると、後方からドアの開く音がした。

神父「……………」

ここの神父であろう人物がつかつかとこちらに歩み寄ってきた。それに気付いた友樹が口を開いた。

友樹「ああ、ごめんなさい！裏口があいていたから入っちゃいました」

神父は無言でこちらに迫る。しかし、窓から漏れる日の光に当たると、まるで嫌がるかの様に避ける。

それに気付いたのか気付かないのか、更に友樹は続ける。

友樹「あ、でもそろそろ帰ろうかなあって思ってた所だったんです。すいませんお邪魔しました」

友樹は裏口から帰る様に逃げた。

そんな友樹を睨んだ神父の後ろに、黒いドレスの派手な女性が立っていた。

「ガドサセダバ？（悟られたか？）」

神父？「ギジャ、ビズギデバギ。ダザボダバザ（いや、きづいてない。ただの馬鹿だ）」

意味不明な言語を喋った二人は、教会の闇の部分に消えて行った。

杉並区 小野寺家 午前8..00

紗由「お兄ちゃんお帰りー」

友樹「ただいまー」

友樹は帰ってすぐに風呂場へ向かった。汗を流すためにシャワーを浴び、出掛ける予定も無いので地味な部屋着に着替えた。

紗由「お兄ちゃん、さっき紗耶香さんから電話来たんだ。なんかケータイ繋がらないからって」

友樹「ケータイ？まだ僕のは充電中だよ、電源落として」

紗由「どうりで連絡つかないわけだわ」

友樹「っていうか、何だって紗耶香。何言ってた？」

紗由「紗耶香さんが、買い物に付き合って欲しいって」

友樹「あー、そう。じゃ行くかな」

紗由「いってらっしゃーい！」

友樹は一度部屋に行き、財布と携帯電話を懷にしまい、出掛けた。

杉並区 駅 午前08..15

友樹「紗耶香、お待たせ」

紗耶香「待ってないよ」

友樹「で、どこ行くの？」

紗耶香「実は……」

友樹「今夜の夕食の食材を買いだいたいんだけど、商店街いっても無かった……………とか？」

紗耶香「……………当たり前！？どうして分かったの？」

すると友樹は「え?! 当たったの？ 僕テキトーに言ったのに……………」
といって笑顔でサムズアップした。

紗耶香としては、そんな友樹に落胆した。本当は違う意味であったのだが……………。

まず切符を買い、電車に乗って隣町へ向かった。

休日だが客足も少なかった。当たり前だ。今は不況の世の中で、自宅で休む人が多いのだ。そんな電車の中で、友樹は口を開く。

友樹「で、他に何か買うもの無いの？」

紗耶香「ふえ？」

友樹「だってさあ、わざわざ隣町まで行くんだよ。何か無いの？」

紗耶香「取り敢えずは……………お昼ご飯かな……………？ 買い出しはそのあとでもいいわ」

ややあって、隣町の駅に到着した。まず適当なところで少し早めの昼食を食べ、スーパーまで行った。

友樹「夕食のメニューって決まってる？」

紗耶香「えーっと……………パスタ……………かな？」

友樹「パスタ以外は？紗耶香ってほんつとに野菜苦手だから……最低でも、青椒肉絲チンジャオロースがいいんじゃない？」

紗耶香「えーっ？ピーマン嫌い、筍嫌い」

友樹「じゃあ、そうだなあ……家で食べてく？」

紗耶香「ふえ？……今、何て？」

友樹「だーから、僕ん家で食べてくかって。ちょうど今日の夕食の当番紗由だから」

紗耶香「でも、いいの？」

友樹「別にいいよ」

友樹は棚に置いてあった食材を手に取り、見比べながら言う。

友樹「……父さんと母さんが死んでもう二年位になるから……：そろそろ二人以上の夕食もいいかなあ……って」

紗耶香は拒みもせず、それを笑って了承した。

杉並区 午後6…41

帰りが遅くなった友樹と紗耶香は急いで走っていた。もう日は傾き始めて、辺りはそろそろ暗くなっていく。

友樹「ほら、紗耶香急いで！」

友樹は紗耶香の腕を掴み走りながら言う。

紗耶香「うっ……………うん／＼／」

すると、紗耶香に黒い影が襲い掛かろうとしていた。しかし、それは瞬時に気付いた友樹によって阻止された。

未確認生命体三号「げぎゃ？」

友樹「！！……………未確認！」

ズ・ゴウマ・グ「ゴセパ、ズ・ゴウマ・グ（俺は、ズ・ゴウマ・グ）」

三号……………もとい、ズ・ゴウマ・グは友樹に目標を変えた。すると、友樹は手を沿えベルトを出し白いクウガに変身した。

クウガ・G「まだ白いクウガ！？」

続く

暗翼（後書き）

名前〓小野寺紗由

年齢〓15歳

誕生日〓5月6日

身長〓159cm

体重〓謎

小野寺友樹の妹。白皇中等部三年のテニス部主将。

家族は友樹と二人暮らしで両親は既に他界、資金面は今もまだ謎。
苦手な物は黒きGで簡単に悲鳴を上げる。

変身（前書き）

タイトル通りなので、お楽しみに。

変身

ズ・ゴウマ・グとクウガ・Gは取っ組み合いながらも、人目の着かないところまで来た。

クウガ・G「何で人を殺すんだ！」

ズ・ゴウマ・グ「ゲゲルンダダゲドド（ゲームのターゲット）」

クウガ・G「言っても無駄か！」

その時だ。背後から覆面パトカーが現れ、中から拳銃を持った一条が出て来る。

一条「下がりなさい！ここは警察の仕事だ」

後続からパトカーのサイレンが鳴ると同時に、ズ・ゴウマ・グは飛び去り、クウガ・Gの変身が解かれた。

友樹「……」

一条「後は我々警察の仕事だ。さ、高校生には危険な目には逢わせたくない」

立ち去る友樹と擦れ違いに、後続のパトカーが続々と現れる。

一条は、今朝の被害者の近くにあった教会を訪れた。理由は簡単。被害者達は、この教会を中心に亡くなっている。

一条「俺の考えが正しかったら、ここに未確認生命体三号が潜んでいるはずだ」

声を潜め、警視庁から頂戴した新型のライフル銃を手に、侵入していた。

しかし、彼は一つミスを犯していた。それは、この教会の神父、もと未確認生命体第三号のズ・ゴウマ・グが天井からぶら下がっていたのに気付いていないこと。

ズ・ゴウマ・グは、神父姿から本来の姿に戻り、一条を襲う。しかし、一条は寸前で避けた。その際に、火を点していたロウソクに当たり、着ていたコートとカーテンに火が移った。

ズ・ゴウマ・グは倒れている一条にトドメを刺そうとしていたその時！

ブオオオオオン！！

ドガアアアン！！

安物のバイクに跨がった友樹が扉をぶちやぶり、侵入した。それと同時に、滑って転倒し、バイクは炎の中で炎上してしまった。直ぐさま友樹は一条にかけより、コートの火を消した。

一条「小野寺君。ここは危険だ！！」

ズ・ゴウマ・グの攻撃を避けながらも、一条は友樹ににげろと言った。しかし、友樹は言った。燃えたぎる教会の中で。

友樹「もう、こんな奴らの為に！流す涙なんて見たくない！」

ズ・ゴウマ・グの攻撃を避け、殴った方がいいが逆に押し飛ばされ、一条がクツシヨンのハメになった。

友樹「みんなには、笑顔でいて欲しいんです。だから、見てて下さい。僕の……変身！」

立ち上がった友樹は両手を下に広げた。それと同時に、七色の光に包まれて腰にアークルが表れる。

それを両手で包み、伸ばした右手を左前に突き出し、左手を引き、右手を右に流し、ベルトの左側のスイッチを両手で押した。

友樹「はぁ！やぁ！」

ズ・ゴウマ・グにパンチやキックを繰り出し、体を赤い装甲が包む。そして、本当のクウガが、一条の目の前に現れた。

ズ・ゴウマ・グ「ボセパデスドンクウガ！（それはクウガのベルト！）」

クウガ・M「クウガ？クウガか」

クウガ・マイティフォームは、外に逃げたズ・ゴウマ・グを追い掛ける。

着いた場所は、日が昇っても殆ど日光が漏れない材木置場だった。ズ・ゴウマ・グは、奇っ怪な動きでクウガ・Mに攻撃を仕掛ける。すると、何処からか、ズ・グムン・バも現れた。

二対一のアンフェアな状況にも、クウガ・Mは怯まず、己の拳を振り回した。

ズ・ゴウマ・グ「ギャアアア！」

突然ズ・ゴウマ・グが苦しみだした。

よくみると、日光に照らされていたのが見えた。

逃げ出すズ・ゴウマ・グを追おうとするが、ズ・グムン・バが吐く蜘蛛の糸でクウガ・Mは拘束された。

クウガ・M「……っあぐ！」

ズ・グムン・バに連れられて、建物の屋上に着いた。そこでクウガ・Mの身動きが取れないのいいことに無慈悲に攻撃する。
しかしクウガ・Mも負けてはいられない。自力で糸を引きちぎり、身の自由を確保した。

クウガ・M「次は、こっちの番だ！」

ズ・グムン・バ「ボソギデジャス！（殺してやる！）」

クウガ・Mはズ・グムン・バの右腕に仕込んでいた鋭い棘を手刀で折った。

バックステップを決め、前転し、ズ・グムン・バの腹に右足で蹴り飛ばした。

蹴られたズ・グムン・バの腹に、封印のエネルギーで生成された紋章が浮かび、その紋章からヒビが入り、ベルトまで到達するとズ・グムン・バは爆発四散した。

クウガ・M「終わ……ったああああ………」

クウガ・Mは変身を解いてその場に倒れ込んだ。

続く

超躍（前書き）

今回はかなり短いと思いますが、読んでください。

超躍

ここ最近、暴走族が大人しくなっていた。理由は簡単、未確認生命体五号が次々に騒音を撒き散らす暴走族を惨殺していったという。一方の警視庁では、新型白バイである、トライチェイサー12000の開発が成功した。勿論、作ったのはミカド研の牧野詩織である。そして、同所の会議室では……

東京都 警視庁 午前7…03

刑事課長の真北^{まきた}二郎^{じろう}と一条、杉田、桜井等の警視庁未確認生命体対策課の面々が揃っていた。

二郎「これまでに、計六体の未確認生命体が存在する。まずは、テープに録画されていた零号。そしてミカド研に襲撃した一号、同所に現れた二号。次に、この写真に写っているのは、不鮮明だが、黒い方が三号に赤い方が四号。そしてつい最近の暴走族を殺害していた五号がいる」

計六体。一体でも厄介な未確認生命体がそれ程いるとなると、命の保証が無いに等しい。

二郎「それと、この不鮮明の写真が撮れた同日に、一号が四号によって成敗されたと、私の耳に届いている」

訂正。計五体の未確認生命体が、今の日本を震撼しているのは事実。

二郎「以降、未確認生命体を発見したら、直ぐに射殺せよ！」

一条「待ってください！」

一条が二郎に反論を出した。

二郎「どうしてだ？」

一条「二号と四号の射殺はちょっと待ってくれませんか？」

二郎「と、言うത്？何か訳でもあるのかね？」

一条「二号は私が一号と接触した際に助けて貰い、四号も私が三号と接触した時も助けてくれました。まだ二号と四号が人を殺害するとは、限りません！」

二郎「そこまで言うなら、二号と四号に関しては君に任せる。勿論、射殺も込みでな」

一条「ありがとうございます」

これにて会議は一旦終了した。

東京都 ミカド研 午後3…03

友樹「でー、このトライチェイサー2000が、この度警視庁から開発を依頼された代物と」

詩織「まーねー。それと、石版にあった碑文、解けたわよ」

友樹「なんて書かれていたんですか？」

詩織「”邪悪なるものあらば、希望の石を手に炎の如く拳と蹴りを繰り出す戦士あり” ってね」

友樹「赤のクウガですね」

因みに、二人はパソコンのキーボードを高速で叩いている。詩織のモニターにはトライチェイサー2000の調整と碑文の解説が、友樹のモニターにはニュースページが展開されている。

友樹「話は変わりますが……」

詩織「どった？」

友樹「裏口の修理、済んでいます？」

詩織「もう直ってるわ」

友樹「そうですか……」

東京都 某所 午後3..55

男「く、来るなあ！」

??? 「……………」

男「う、うわあああああ！！！」

男は、見たことも無い生物に胸倉を掴まれ、生物が高くジャンプして、落とされた。

男は、未確認生命体五号によって、転落死させられたのだ。

ズ・バザー・バ「クウガ……………」

続く

裏影（前書き）

今回もかなり短めです

裏影

東京都 杉並区 午後5…29

友樹「え、また……被害者が？」

ハヤテ「はい。……増えてきてますね、未確認の被害者が」

下校中、ハヤテはまた未確認生命体の被害を友樹に話していた。友樹は辛く暗い顔をして俯き、ハヤテはバツが悪い表情をしていた。2010年というこの御時世、どんどん人口が減ってしまっただけは破滅しか無いだろうと友樹は思う。

杉田「おい、そこの白皇の少年」

二人を呼んだのは、一条の同僚の杉田刑事だ。今は職務中では無く、両手には買い物したであろう野菜が一杯入ったビニール袋を下げていた。

友樹「はい」

ハヤテ「えっと……」

杉田「警視庁の杉田守道。一条の同僚だ」

友樹「小野寺友樹です」

ハヤテ「僕は綾崎ハヤテです」

杉田「綾崎君、君は未確認生命体第一号に遭遇しただろうか？」

ハヤテ「ええ、まあ」

杉田「遭遇していて生きているとは、君は知っている。だが安心しなさい、我々が安全な世の中にするからな」

——私服で買い物袋ぶら下げて言うことだろうか。——と思う友樹とハヤテだった。

しばらくすると、杉田は去った。

同日 某所 午後8…03

「ゾガザ、ゲゲルパ？（どうだ、ゲゲルは？）」

一人の薔薇のタトゥーの入った女性が、アフロで赤いマフラーを巻いた男と、野生的な女性に話し掛けた。

「ギギバンギザ、ロンザギパギ（いい感じだ、問題無い）」

男はみるみる内に飛蝗怪人ズ・バザー・バに変身し、野生的な女性
は豹怪人ズ・メビオ・ダに変身した。

「バザー、クウガを侮るな」

最初の女性は何故か流暢な日本語を話していた。

その影で、仕置きを受けて多少ボロボロになっていたズ・ゴウマ・グがいた。

続く

裏影（後書き）

今に思った事ですが、バザーとメビオの順を間違えてしまいました

青龍

東京都 白皇の校庭 午後5..09

友樹「!、待て！」

友樹は下校中に未確認生命体五号を発見し、クウガに変身した。

クウガ・M「たああああっ!!」

ズ・バザー・バ「ふんっ！」

クウガのパンチを避けた未確認は口を開いた。

ズ・バザー・バ「キョグギンジャンママ、ズ・バザー・バザ（驚異のジャンパー、ズ・バザー・バだ）」

クウガ・M「毎度毎度何言ってるかわかんないけどね、もう人殺しはさせない！」

バザーはクウガを誘うように袋小路まで誘い込み、野外階段を七階程飛び越え、屋上に着いた。

クウガも追い掛けようとジャンプするが、途中で届かなくなり、尽くバザーにたたき落とされる。

クウガ・M「もっと高く、跳べれば……」

クウガが思ったその時、アークルの中心が青く光り、クウガをもう

一つの戦士、ドラゴンフォームに変えた。

クウガ・D「色が変わった？」

考えるよりも早く、地を蹴ってジャンプする。その跳躍力は赤いマ
イティフォームの時とは違い、すぐに屋上のバザーと合流した。
素早さを活かし、キックとパンチを連続で繰り出すが……。

ズ・バザー・バ「？」

クウガ・D「効いてない!?!」

ズ・バザー・バ「ビバブバ! (効かぬわ!)」

クウガ・D「ぐあっ……!」

そしてクウガは屋上からたたき落とされ強制的に変身が解かれた。
その下には、たまたま捜査中の一条がいたので、ボロボロの友樹は
関東医大に連れていかれた。

東京都 関東医大 午後7…32

友樹「う…………ん…………ここは……」

一条「関東医大だ。小野寺君、無茶はするなと言っただろ？」

椿「というか、一条。何で俺がここに呼ばれなきゃならない」

一条「スマン椿。ちょっとな？」

何処か苛立ちを表している白衣を着た男が、一条を睨んでいた。その近くで、友樹を心配そうに見守っていた紗耶香と紗由とついでに来たであろう詩織が来ていた。

紗耶香「友樹！」

紗由「お兄ちゃん！」

友樹「紗耶香、紗由……。それと詩織さん」

詩織「私はおまけか？」

友樹「実は今日、青いクウガになったんです！」

椿「（…クウガ…？四号の事か？）」

一条「いいか椿、今日呼んだのは、彼……小野寺友樹君の検査を頼みたいのだが……」

椿「……………あいよ」

一条と椿が会話をしている最中、詩織は友樹に青のクウガについて聞き出した。

詩織「どういうこと？」

友樹「なんでだかわかんないんですけどね、高く飛びたいなあ…
って思ったら急に赤から青に変わって、ジャンプ力も大幅に上がっ
たんです。それに力も弱くなってて…」

詩織「青…分かったわ。解説してみるから、今は安静してなさい」

友樹「分かりました」

詩織が退室すると、紗耶香と紗由が友樹に近寄る。

紗耶香「友樹、いつまで戦うの？」

紗由「そうだよお兄ちゃん。次は死んじゃうかも知れないんだよ？」

二人の忠告を受けた友樹はサムズアップし、笑顔で言った。

友樹「大丈夫大丈夫！なんとかなるよ！中途半端な事はしないって、
父さんと約束したから」

一息付いて友樹はまた言う。

友樹「皆の笑顔を護るのに、多少の無理は付き物じゃない？」

それを聞いた紗耶香は友樹の笑顔に連れられ、次第に笑顔になる。紗
由はそんな二人に内心呆れつつも、微笑ましく見ていた。
その後、友樹は椿と一条に連れられて、CTスキャンを行った。

椿「おい一条。俺を危ない橋に渡らせたな？」

一条「それでもなければ、お前は協力しなかっただろう？」

検査後、椿は友樹と紗耶香と紗由にスキャンした腹部のレントゲンの様な写真を見せた。

椿「よく見とけよ小野寺君。お前さんの腹の中にクッキリとベルトが見えるだろ？」

友樹「はい、見えます」

椿「そのベルトから各神経に接触……というかまるで融合したかの様に繋がっているんだ」

紗耶香「はぁ…」

椿「簡単に言うと、ベルトから小野寺君に向け、力をあげている状態何だよ」

紗由「お兄ちゃん凄い！」

正しくはベルトが凄いのだが、紗由はちょっとだけズレているのだ。

椿「まあ……ある意味凄いのだがな。小野寺君、今右足に何か感じては無いか？」

椿がいうと、友樹は右足を撫でながら「ジンジンと力が湧くような感じがします」と右足を叩いて言った。

椿「以前一号を倒した時に、右足のキックでやったんだよね？」

友樹「はい」

椿「それが答えだ」

そして椿は、続けるようにこう言った。

椿「このまま行けば、小野寺君はいずれ……未確認生命体と等しい存在になるかも知れない」

東京都 ミカド研 午前1…03

詩織「ダメだわ…。青、空、水……ある意味青の戦士については…
…解読出来ない……」

青、空、水と単語を入れてみたが、それでもヒットしないのだ。
ただ水という単語に関しては、完全にヒットしない訳では無かった。

詩織「まさか……これなら…！」

そうして、流水というキーワードを入力した。

東京都 白皇 午後1…01

友樹「……で、ハヤテ」

ハヤテ「―――何でしょうか？」

昼休み。屋上にいた友樹とハヤテは、目の前にある二つの修羅を見ていた。

ヒナギク「あらあ？まだ帰っていなかったの？」

紗耶香「おあいにくさま。でも、帰るのは貴女じゃなくて？」

二人は笑顔だったのだが、何処か恐怖さえも感じていた。ただそれが、いつも平和だという事がよくわかる。そう友樹は青空を眺めていた。

友樹「平和な時は当たり前で、よくわかんないけど…未確認が現れてからそれが幸せだったんだよね？」

ハヤテ「そうですね。今も未確認が……」

その時だった。校庭から悲鳴が聞こえてきた。四人が屋上からその声の方を見ると、未確認生命体五号のズ・バザー・バが現れた。

友樹は屋上から飛び降りながらクウガに変身。残った三人は各生徒の避難誘導に向かった。

クウガ・D「来い！ってまた青いクウガ？！」

ズ・バザー・バ「グウウ……」

クウガは蛇の構えでバザーの猛攻を受け流すが、一方的にダメージが溜まっていくクウガだった。

紗耶香「電話!?!」

生徒の避難誘導を終えた紗耶香に携帯が鳴った。今は非常事態なのか、使用が許可されていた。

紗耶香「もしもし!?!」

詩織<あ、紗耶香ちゃん? 私よ、詩織>

紗耶香「詩織さん?! 今未確認が…!」

詩織<碑文の解説出来たわよ。しかも青の戦士!>

紗耶香「え!」

クウガとバザーは絡み合いながらも被害を最小限に留めていた。しかし、青のクウガは素早いだけで、連続して浴びせる攻撃も、歯が立たない。

すると、上の教室の窓から紗耶香が顔を出してクウガに言い放った。

紗耶香「友樹! 詩織さんからメッセージよ!」

クウガ・D「何だって?」

紗耶香「邪悪なる者あらば、流水の如く受け流し、長きものを振るう戦士あり！」

クウガ・D「長きもの?!」

バズーから放れたクウガは、落ちていたラクロスのラケットを拾い上げ、ブンと振り回す。そのラクロスのラケットは専用の武器・ドラゴンロッドに変えた。

クウガ・D「これなら！」

クウガは素早い動きでドラゴンロッドを振るい、バズーの攻撃を受け流し、ドラゴンロッドの先端部分をバズーの腹部にぶつける。ぶつけた箇所には、クウガの封印のマークが生成され、そのマークを中心に亀裂が走り出す。その亀裂がバズーのバックルに到達すると、バズーは爆発した。

クウガ・D「やった。勝った！」

続く

東京

東京都 ミカド研 午前1…21

エイト「主任、最終チェック完了致しました。これでもう完成です」

詩織「サンキューエイト」

完成されたトライチエイサー。超高性能白バイという別名はただの飾りだ。

こうしてこのバイクも目の見ることが出来る。これをベースに量産型の生産に今度は手が向く。

エイト「トライチエイサー2000。無線通信はもとより、高性能のエンジンを積み給油をしなくても済む。どんだけチートなバイクですか！しかも色が変わるって何処の種割れですか！！」

詩織「まあまあ。いいじゃない量産型は普通に給油が必要だし、無線通信以外の能力は皆無だから」

東京都 杉並区 午前2…24

紗由「きゃあああああ！！」

友樹「紗由煩いぞ」

水を飲みに来た紗由の叫びに、部屋から歩いてきて欠伸しながら注意する友樹。そんな紗由の指差す方に、黒きGが居た。

友樹は黙って古新聞を丸め、それに向かって強くたたき付ける。勿論Gは難無く潰れ、古新聞ごとごみ箱に捨てた。

友樹「あのね、今何時だと思ってるの？御近所迷惑考えなかった？」

紗由「だってえ…」

友樹「はいお仕置き」

ペチッと軽いデコピンを紗由に浴びせた友樹は、踵を返し部屋へ戻った。

紗由は頬を膨らまし拗ねたが、睡魔に負けたのかさっさと部屋に戻った。

翌日 杉並区 午前6…05

友樹とハヤテは日課の早朝ランニングを行っていると、雌豹型の未確認生命体六号と遭遇した。

友樹がすぐにクウガに変身し、ハヤテはすぐさま警察に通報する。

クウガ・M「六号?!」

ズ・メビオ・ダ「ボグゴブンバシグゾ、ズ・メビオ・ダザ（高速の狩人、ズ・メビオ・ダだ）」

未確認生命体六号——ズ・メビオ・ダは名乗って早々クウガにそのキバを曝し、切り裂く様に振りかざす。しかしクウガはそれを瞬時に避け、メビオの腹部に荒々しく拳をぶつける。

途端、メビオはクウガから放れると、クウガを誘導するかの様に袋小路までおびき寄せた。

クウガ・M「何考えてるかはわかんないけど！もう人殺しは止めろ
おお！！」

クウガとメビオの距離が縮まっていく。すると、数台のパトカーが現れ、中から拳銃を構えた警察官が出て来た。その中に杉田刑事もいた。

杉田「撃て！」

杉田の号令が発せられると、次々と銃弾がクウガとメビオに当たる。その際、メビオは右目を撃たれてしまい、やむなくその場を去った。一方のクウガもその場を去った。クウガが去ると同時に一条の乗ったパトカーが到着した。

一条「小野寺君……」

東京都 某所 午後5…06

メビオは橋の下で唸っていた。撃たれた目に激痛が走るからだ。そこを、一駐在が発見。無線で応援を呼ぼうとするが、恐怖に駆られ出来ない。

メビオは何を思ったのか、駐在に目もくれずその場を去った。

続く

疾走（前書き）

今回トライチェイサー120000が出ます

疾走

東京都 杉並区 午前8…06

＜警視庁より入電。現在未確認生命体第六号は数名の暴走族員を数人殺害したのち逃走中――。繰り返す――＞

数台のパトカーの中、若い女性の声が報告する。運転している一条はマイクを取り応答する。

一条「了解」

杉田「そういや一条。おまえさん今朝の朝刊見たか？『仲間殺しの四号』『四号は人類の味方？』って見出し」

一条「ええ。でも何故マスコミは…」

杉田「なににせよ、四号は四号、六号は六号である事は確かだ」

一条「ですね」

東京都 白皇学園 午前9…24

休み時間中、友樹は読みかけのライトノベルを読み出す。物語の主人公はペガサスを駆ける勇者で、実は異世界から召還されたただの高校生であった。

紗耶香「何読んでるの？」

友樹「ちよつと読みかけの小説をね」

その時だ。未確認生命体第六号が白皇学園に潜入し、数名の不良をターゲットに殺人を犯していく。

素早くヒナギクと紗耶香の避難誘導をしている隙に、友樹は窓から飛び降りクウガに変身する。

クウガ・M「また会ったね」

クウガを視界に捉えた六号ことズ・メビオ・ダは殺人の手を止め、
ターゲット標的をクウガに変え、鋭爪をクウガに向ける。

ズ・メビオ・ダ「クウガ……ボンドボゾ（クウガ……今度こそ）」

それからしばらく取っ組み合いの戦闘が続いていた。

そこに数台のパトカーが現れ中から複数の警官が出る。勿論一条と杉田もいる。

すると、メビオは白皇の敷地内に逃げ込み、クウガ、杉田、一条、警官隊と続いて後を追った。

メビオを見失ったクウガは一条と合流した。

クウガ・M「一条さん」

一条「小野寺君。先日はすまなかった」

クウガ・M「いや大丈夫ですって。ちよつとくすぐったかったですけど……大丈夫です！」

サムズアップするクウガの仮面の下はいつも絶やさなない笑顔である事は確かだと悟る一条。

杉田「ぐわっ！何しやがる！」

その時背後で、メビオに襲われる杉田がいた。すぐにクウガは杉田を殺そうとしているメビオを蹴り飛ばす。そして啞然としている杉田にサムズアップし、メビオを追った。

クウガ・M「なんてすばしっこい！こんな…」

メビオは振り返らず白皇の敷地内から飛び出た。安全だと判断し、変身を解いた。

その後、緊急の集会の後、残った授業を行わず下校となった。

東京都 杉並区 午前10…02

帰宅した友樹の家に、いつものメンバーがいた。それと+aとして動画研の三人もいた。

紗由が人数分の紅茶、コーヒ―、緑茶を盆に乗せ持ってきた。因みに、友樹と紗耶香は友樹の自室にいうという。

ハヤテ「落ち込んでますかね、小野寺君」

ナギ「仕留め損ねたからか？」

ヒナギク「いいえ違うわ。以前杉田さんに発砲を受けたのが、まだ引っ掛かるんでしょうね」

紗由「でも、兄は気にしてませんでしたよ？いつもの通り大丈夫だって心配するなって言っていました」

泉「にやはは〜…」

理紗「『久々の登場がここだけ…』…って泉、そこは言わない約束だ」

泉「にやはは〜…」

美希「『次回は友斗君を弄りたい』…叶うといいな」

するとそこにインターホンが鳴り響き、紗由が来客を迎入れた。

友樹はベッドの毛布に包まっていた。一号ズ・グムン・バと三号ことズ・ゴウマ・グを一度逃した経験があるが、今回のメビオに関しては一度ならず二度も逃がしてしまった。逃がすということは、更なる被害者を増やすという事に繋がる。

紗耶香は友樹に声をかけるが、一向に口を開いてはくれない。

紗耶香「ねえ、友樹。お願い、元気を出して」

友樹「……………」

その時、部屋のドアが開き先程のインターホンを鳴らした人物が入室する。

一条「小野寺君。……いや、友樹。いつまでめげているんだ？」

友樹「めげてませんよ。ただ、自信を無くしただけです」

一条「自信なあ……」

一度溜息をついた一条は、友樹を包んでいる毛布を引っぺがし、友樹の胸倉をつかみ取る。

一条「何いじけてんだよ!!」

友樹「いじけてる？ 貴方は以前言いましたよね？ 僕は何もしなくてもいいって」

一条「ああ、言ったださ！」

友樹「だったらお言葉に甘えさせていただきます」

一条は右手を高く上げたが、すぐに下ろし友樹の拘束も外した。

一条「お前を殴る位なら、あるところへ連れてった方がまだましだ。

友樹、お前は今何がしたい？」

何がしたい？ 今の友樹の中でなにかがモヤモヤと渦巻いていたが、今そのモヤモヤが解かれ、自分の本心が出て来た。

友樹「……皆の笑顔の為に、戦います。でなきゃ後悔する。父さん

との約束も果たせなくなる。だから、もう一度、戦います！」

その友樹の目に、まるで紅い焰が映ったかのように輝いている。一条はそんな彼に言った。

一条「ミカド研で渡したい物がある。ついて来なさい」

友樹「わかりました」

東京都 ミカド研 午前11…21

ミカド研に到着した一条と友樹はエイトにしばらく待たされた後、奥深くの区画にまで連れられた。到着した場所にそれはあった。一度友樹も設計図だが目にしたトライチエイサー2000Aがそこにあった。

友樹「これって……！」

一条「新型高性能白バイク、トライチエイサー2000Aの試作品・トライチエイサー2000だ」

一条が言い終わると、部屋のドアから詩織があるものを持って来た。詩織「けどね、これに乗るのにはこれが必要なのよ。だから、これは友樹が持ちなさい」

友樹「これって……」

手渡されたそれは、一見バイクの右ハンドル。トライチェイサー2000本体を見るとちょうど、右ハンドルだけが無い。これこそがトライチェイサー2000の起動キー兼警棒のトライアクセラーだ。友樹は一条と詩織に一礼し、トライチェイサー2000に跨がりトライアクセラーを装着する。

一条「暗証番号はまだ設定されていない。四桁の数字を入力してください」

暗証番号を設定し終えた友樹はスイッチを一つ押す。途端に白一色のボディに色が走る。

詩織「別にこれはPS装甲じゃないからね」

詩織の言った事を流し、友樹は構えを取り叫ぶ。

友樹「変身！」

変身が完了すると同時に目の前のシャッターが開き光が差す。バイクを走らせたクウガはメビオを追う。

続く

疾走（後書き）

次回はメビオが…

雌豹（前書き）

今回も短いです

雌豹

新型バイク・トライチェイサー2000。その速度は、充分にズ・メビオ・ダに追い付ける。

クウガはそのトライチェイサー2000を操り、メビオを廃墟と化した健康ランド跡地に追い込む。

クウガ・M「ハッ！」

建物を走るメビオをトライチェイサー2000で追うクウガ。やがて、最上階に当たる区画に到着する。

ズ・メビオ・ダ「クウガアア……！」

クウガはバイクから降りると、メビオと取っ組み合う。熱を込めた拳はメビオに直撃する。

ズ・メビオ・ダ「クウガ……ゾボラゼゲゲルンジャラゾ……（クウガ……何処までゲームの邪魔を……）」

クウガ・M「皆の笑顔を守る為に、僕は戦う！」

メビオから距離を取ったクウガは、前転し腕のバネを利用しメビオの腹部にマイティキックをぶつける。

やられたメビオの後方の壁を突き破り、外に飛ばされ程なく爆発する。入れ代わりに一条達警官隊が突入する。

杉田「四号……」

クウガは無言でトライチェイサー2000に跨がり、その場を去った。

東京都 三千院家 午後7…21

友樹「もう食べられないって…」

メビオを討伐した友樹は、トライチェイサー2000のしまい場所に悩み、ナギの家にそれを預ける事にした。一条には悪いかも知れないが、仕方のない事だ。

それと、今は三千院家は何故かどんちゃん騒ぎだ。メンバーのいつものメンバーに動画研の三人と詩織も（ついでにエイトも）いる。先ほどたらふくご馳走を口にしたため、外のベランダにいる。

マリア「ここにいたんですか？」

友樹「…はい。たまに外の空気にも当たらなきゃ、やってられないですよ」

マリアも友樹が四号だクウガという事は知っている。情報源は泉だ。

マリア「先ほど、紗耶香さんが呼んでましたよ。行ってあげたらどうでしょうか？」

友樹「わかりました」

友樹はマリアに促され、紗耶香の下へ行った。

夏はもう、始まっていた。

続く

雌豹（後書き）

次回は、緑のクウガ

傷心（前書き）

久々の投稿がこんなにかかるとは…

クウガを全話見ただけでも…

傷心

東京都 杉並区 午前8…03

街中を歩いていたサラリーマンが突然力抜けた様に倒れ死亡するニュースを一人家で紗由が見ていた。

紗由「これじゃあ、マトモにお買物出来ないよお。でもそらとぶ未確認かぁ。お兄ちゃん勝てるかなあ」

そう呟きながら、ソフトせんべいをかじった。

その後、絶叫が聞こえてきたのは、言うまでもない。

東京都 ミカド研 午前8…07

ミカド研の詩織に呼び出された一条と友樹は一人の少女と対面していた。その娘は、なにかが入った小箱を抱いて俯いていた。程なく、詩織が現れ少女の紹介をする。

詩織「彼女、零号の被害者夏目教授の娘さんで…」

マナ「夏目マナ…」

俯き加減に名乗った夏目マナはその夏目教授の愛娘。教授から沢山の愛を受けてここまで育った。

歳は紗由と同じなためか、何処かほっとけない友樹だった。

マナ「…これ、父の遺品の一つです」

マナは今まで抱いていた遺品を詩織に渡す。

木の箱で出来たそれの中に、何かの石があった。それもクウガのベルトにも碑文にもあった古代文字があった。どうやら、クウガに関する物の一つと見て、間違いない。

エイト「なんと……」

マナ「じゃ、私は…帰ります…」

友樹「ちょっと待って！」

去ろうとするマナの手を友樹は取り、呆気に取られるマナをよそに友樹は言う。

友樹「まだ未確認が空から狙ってるんだ。君だっていつ狙われるかわからないんだよ？」

東京都 某所 午前9…03

メ・バヂス・バは、またもゲゲルの標的を見つけ出した。そこは臨時休業中の市民プールの一角。

バヂスは右腕に仕込んだ毒針を目標となっている係員に向け、放った。

プシュン

脳天から針を打ち込まれた係員の男は絶命し、倒れた。撃って間もなく、標的を撃った印しのグセパが何者かに撃たれグセパが落ち、バヂスはそれを取りに降りた。

クウガM「僕が相手だ！」

メ・バヂス・バ「ぐ！」

クウガM「一条さん、十号は僕が相手します！」

一条「頼む！」

すると、黒いコートに黒い帽子を被った人間体のゴウマがバヂスの落としたグセパを拾おうとする。

しかし、一条はグセパを拳銃で撃ちゴウマに威嚇射撃で逃がす。

クウガM「さあ、どうする？」

すると、バヂスは戦わず空に逃げ出した。後を追うクウガはウォータースライダーの乗り場をジャンプで移動し追うが、全く追い付かない。

やがて、頂上に着いた途端バヂスを捕捉出来なくなっていた。何度も探そうと、辺りをキョロキョロとするが、常に死角からバヂスがパンチとキックを繰り返す。

クウガM「よく見えたらなあ……」

そうクウガが呟いた瞬間、ベルトのバックルが緑色に変わり、それ

に従ってクウガも緑色に変える。

クウガP「また姿が……っがあ!!」

新たなる姿を手に入れたクウガだが、普段は聞こえない遠くで走る車の騒音と人々の話し声、そしてここから三十メートル先の看板の埃まで急に見えだす。

感覚が急に優れ過ぎたのか、よろよろとよろめくクウガをバヂスは地表に叩き落とす。

続く

緑銃（前書き）

オリジナル入れておりますお久しぶりです（？）

緑銃

強制的に変身が解け、頭を押さえ苦しむ友樹を一条は椿の下へ連れ出した。

東京都 関東医大

椿の診断結果は、次の通りだった。

椿「まず君の変身した緑のクウガだが、主に色んな事が聞こえ、遠くの物も見えたと言うんだね。だから長時間使用出来ず、その後一定時間は変身出来ないようだ。現に先程のレントゲンを撮ったから見なさい」

友樹「ああ……疲れきってますねえ……」

一条「となると、緑のクウガは一分も経たない内に変身が強制解除、そしてもし変身出来るとしたら、変身解除後どれぐらいだ椿？」

椿「直後だったら2時間はかかる。そんで後100分だろな」

ということは、残りは一時間と四十分。その間に、未確認が殺害を犯さなければ……。

友樹「取り合えず、詩織さんに連絡入れて見ます。未確認はその後で」

一条「そうだな。それと、今回の未確認は一定時間経たないと次の殺人は出来ないらしい」

東京都 ミカド研

友樹から連絡を受けた詩織は碑文の解読に専念していた。
緑と言うから、木、草、虫等打って見たが失敗。掠りもしなかった。

詩織「あー！もう、なあって解けないのー！」

騒ぐ詩織の声に反応してか、エイトがやれやれと言わんばかりに入室する。

エイト「主任、いつまでも日に当たらないと。窓開けますからね」

エイトが窓を開けると、気持ちが良い位の風が入って来た。因みに今の季節は夏真っ盛り。

詩織「！？——風……そうよ、風よ！ありがとうエイト！早速やるわよ！！碑文の解析……！！」

落ち込むエイトを余所に、詩織は風と入力した。

東京都 某所

紗由はマナを連れ、夕食の買い出しにスーパーまで来ていた。その際危うくインスタント食品を買おうとしていた紗耶香を捕まえる。

紗由「紗耶香さぁん、好い加減にインスタント食品を買うの控えてくださいよ…」

紗耶香「紗由ちゃんだって知ってるでしょ？私料理出来ないし。最近パパとママ帰り遅いし…」

二人のやり取りを見ていたマナは、突然失笑してしまう。突然笑われた二人は、マナに問う。

紗由「マナさん！？そんなに可笑しいかな？」

マナ「あ、いえ。二人を見ると、ホントの姉妹に見えるんですよね」

紗耶香「はい?!」

マナ「それに、紗耶香は友樹さんの恋人ですか？」

紗耶香「あ、…や…ただの幼馴染みっただけで…」

紗由「それにお兄ちゃん、色恋沙汰に鈍いから」

それを聞いたマナは、スイッチが入ったかの様に語りだす。

マナ「鈍いならば、無理やりでも気付かせるんです。特にー、シチ

ユエーションとしてはー……」

次にマナはこのような言った。

まずなるべく密室に近い場所が最適。特に自宅の自分の部屋か彼の部屋。

次に、それに持ち込めるように標的^{ターゲット}を誘う。何かと理由を付けた方が最適。

そして最後はゴールイン。

マナ「つてな感じです」

紗由「ちよっと待って！」

紗耶香「……………／／／」

紗耶香は顔を赤らめながらも、マナの意見を参考にしていた。それと同時に、友樹から聞いた話で、彼女の父は未確認番号に殺された。

東京都 潰れたボーリング場 午前10…9

バヂスは、怪人体のまま薔薇のタトゥーの女から新たなグセパを受領し、どこかへ飛び去る。そのタトゥーの女にズ・ゴウマ・グからグセパをせがまれるが、軽くあしらう。

東京都 団栗海岸 午前10…34

買い物を済ませた紗耶香達はここ団栗海岸に付いた。そろそろ夏休みだと言うのに、人はいない。

紗由「まだ未確認、倒されて無いみたい……」

マナ「……………紗由ちゃん、今まで気になった事があるんだけど、いかな？」

紗由「何？」

マナ「どうして友樹さんは私をこんなにまで心配するのかな。帰ろうとする私の腕を掴んで……」

紗由「え、えーと……………そ、そういえば何でだろう？」

わざと知らない振りをする紗由を見兼ねた紗耶香は流木に腰を下ろし、マナに語りかける。

紗耶香「友樹と紗由ちゃんはね、お父様とお母様を昔亡くしちゃったの。先にお父様が旅先のリビアで流れ弾に…………お母様は、それから数年経って過労で倒れてそれで……」

紗由「お父さんは冒険家で、平和主義者だったの。争い事が起きる度に仲裁に入って揉め事を収めたの。それが…リビアに冒険の旅に行ったときも…多分お父さん争いはイケないんだって諭そうとしても仲裁しても叶えられず、流れ弾に……」

紗耶香「お母様はお父様の保険金じゃ足りないと思い、必死に働いて……食わずに必死に……休みも取らずに……」

紗由「お兄ちゃん、言ってたんだ。倒れたお母さんを病院まで運んだんだけど……軽かったって……」

紗由は大粒の涙を流し、紗耶香はまるで身内が亡くなったかの様に泣いていた。

マナは申し訳なさそうな顔をしていた。マナはまだ幸せな方だ。母がいる。

マナ「……ごめんなさい。不謹慎な事を……」

紗由「いいよ、そうだよねマナちゃんのお母さんまだ生きてるもんね」

東京都 喫茶団栗 午前10…36

喫茶店でコーヒープレイクしていた友樹のケータイに、一条から通話が掛かった。内容は、監視カメラに十号が写ったからである。

一条く次の被害者が出る前に、早急に対処するんだ！>

友樹「分かりました。あ、お勘定！」

ヒナギク「300円よ。未確認相手に大変ねほんと」

友樹「だって、何も出来ないってすつごく後悔するからさ。じゃ！」

友樹は表に停めたトライチェイサー2000を起動し、十号の殺害予測地点を知るべく、トライチェイサー2000に詰まれたトランシーバーで一条に連絡する。

一条く予測地点は団栗海岸だ！>

友樹「了解です！いますぐ急行します！！」

東京都 団栗海岸 午前10..37

紗耶香の携帯に通話が入った。相手は詩織だった。

紗耶香「詩織さん？」

詩織<おー、紗耶香ちよつと聞いて、碑文の解読また出来たよー！次は緑の戦士！>

紗耶香「またですか！？」

紗耶香は驚くが、詩織は止まらず解読結果を伝える。

詩織<“邪悪なる者あらば、その姿を彼方より知りて疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり”ってね>

紗耶香「分かりました。友樹に伝えます！」

通話を切ると同時に、トライチエイサー2000に跨がった友樹と覆面パトカーに乗った一条が現れる。

友樹は真っ先に紗耶香達に寄ってここから逃げるように言い出した。

友樹「紗耶香、紗由、マナちゃんここは危険だ！」

紗耶香「それより聞いて友樹。緑のクウガは、射抜く物が必要なの！」

友樹「射抜く……物？」

一条がこちらに走り寄って、上空に微かに十号が見えたらしくそれを伝えると、紗耶香は碑文の解読結果を報告し、友樹は上空を見ながらアークルを出して変身する。

友樹「変身！」

風のような変身音が響き、クウガは緑のペガサスフォームに変身する。その際意識を一点に集中しているのか、前回の様に頭痛に苦しんでいる。

一条「友樹！」

クウガは一条からコルトパイソンを受け取ると、それは原子レベルで変換されペガサスボウガンに変わる。

すると、空からバヂスの針が放たれた。しかしクウガはそれを指で挟み、ペガサスボウガンをバヂスに向け引き金を引く。

クウガ・P「ハッ！」

プシュッ！

クウガのその眼には、しっかりと疾風弾がバヂスに直撃したのが分かる。

そしてバヂスは海面に激突し、バツクルが割れ爆発四散した。

東京都 東京駅 午後1…09

マナは友樹達に別れを告げ、故郷に戻った。
別れを告げる際、友樹に向けてこう言った。

マナ「ありがとう。お兄ちゃん」

それを聞いた友樹はどうしていいか分からず、紗耶香と紗由に至っては苦笑いするしかなかった。

続く

緑銃（後書き）

次回は出来れば紫のクウガ

遺跡（前書き）

今回短いつす

遺跡

東京都 杉並区 午前6・57

夏休みが始まり、二週間弱が経った。これまで9号まで出たが、今の所未確認の活動は表沙汰にはなっていない。なので友樹は惰眠を貪っていた。休みなので、早く起きる必要は無い。

一度目覚ましを確認して、二度寝に入ろうとする友樹は寝返りを打ち、抱き枕を抱く。

友樹「……あれ？ 僕抱き枕持ってたっけ？」

寝起きなのか思ったよりは声は出ず、思い瞼まぶたを開く。そこにいたのは、十年以上も見慣れた、自分の幼馴染みだった。

友樹「何だ紗耶香か……。って、紗耶香!？」

状況を確認するのに多少時間はかかったが、今自分が抱き枕と勘違いしていたのは、幼馴染みの芦河紗耶香だった。紗耶香は友樹の絶叫に目を覚ましたのか、目を擦り起床する。

紗耶香「おはよー、友樹」

友樹「いや、その前に何で僕の布団の中にいるの!？」

紗耶香「今日が何の日だか言えたら教えてあげるー♪」

すると、ドアが開き部屋に侵入してきた。

侵入してきた人物は、友樹の妹である紗由だった。その手にはビデ

オカメラが握られており、顔はにたーっと笑顔だった。

友樹「さ……紗由？」

紗由「お兄ちゃん。さっき詩織さんから電話でね紫のクウガの解説結果出たの」

友樹「ちょ……紗由？」

紗由「邪悪なる者あらば、鋼の鎧を身につけ、地割れの如く邪悪を切り裂く戦士ありって」

友樹「紗由さーん？」

紗由「じゃ、小作り頑張ってー」

友樹「いや、違うからああああ！！！！！」

長野県 九郎ヶ岳 同時刻

ミカド研により派遣されている三千院発掘隊はまたもクウガに関する化石の様な物体を発掘する。

繋ぎ合わせたそれは、巨大なクワガタの形をしていた。

続く

遺跡（後書き）

次回こそ、ギイガを出したい所です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7730p/>

仮面ライダークウガ！のごとく！

2011年10月7日14時51分発行